

『居場所への参加に関する調査』

報告書

早稲田大学文学学術院 石田光規

2023年2月

『居場所への参加に関する調査』報告書 _____ 目次

1 調査概要	1
2 回答者の参加のあり方	3
3 活動に頻繁に参加する人	7
4 活動に参加した理由、活動から得たもの	10
5 代表者の意向と参加者の満足	14

資料 調査票

1 調査概要

1-1 目的

本調査は、子育てをしている母親を支援する事業を行っている NPO の参加者の頻度や満足などについて分析することを目的としている。

2019 年に行った調査研究から、NPO への参加者は非参加者に比べ、孤独感が低いこと、自己肯定感が高いことが明らかになった。そこで、本調査では、では、どういった方々が活動に頻繁に参加しているのか、活動に満足している人はどのような人なのか追究した。この分析を通じて、活動に参加している人への支援の方策を検討する。

表 1 回収数

	度数	うちweb	%
A	13	7	7.1
B	12	6	6.6
C	20	20	10.9
D	11	11	6
E	10	8	5.5
F	55	55	30.1
G	5	5	2.7
H	13	13	7.1
I	14	13	7.7
J	4	2	2.2
K	13	13	7.1
L	5	5	2.7
M	8	1	4.4
合計	183	159	100

1-2 調査手続き

具体的な調査手続きは以下の通りである。まず、調査に協力していただける NPO を探索した。そのさい、まず、一定の都市規模をもつ地域に立地し、子育て支援の活動をしている NPO 団体を抽出した。次に、抽出された団体に調査への依頼状を送付し、お引き受けくださった団体のメンバーに活動参加者の調査票、代表には代表調査票を送付し、郵送にて回収した。そのさい、Web の調査票も作成し、インターネットからも回答可能にした。調査への協力が得られたのは 13 団体、活動参加者の回答は 183 票、代表者の回答は 13 票である。なお、回答者は女性に限定している。

各団体からの回収数は表 1 の通りである。この表を見ると、団体 F からの票が突出して多いことがわかる。そのため、分析にも団体 F の回答者の

傾向が反映されやすいことに留意しなければならない。また、回答者の大半はインターネットを介して回答している。本研究は以上のデータをもとに分析を行う。

1-3 回答者の属性

調査に回答していただいた方の属性は、表 2 のとおりである。表 2 は、最頻値を太字で強調している。

回答者は大半が既婚者であり、大学卒が 50.8%と半数以上を占める。夫の最終学歴は 66.7%が大卒以上であり、日本に住む人びとを対象とした一般的な社会調査よりも、やや学歴が高い。

働き方は、本人は非正規雇用が 34.1%と最も多く、夫は自営業と正規雇用で約 9 割を占める (88.5%)。無職の人は 2 割弱とあまり多くなく、大半は何らかの仕事をしながら活動

に携わっている。

居住形態は戸建て持ち家が 39.3%と最も多く、次いで、賃貸住宅と分譲マンションがほぼ同じ数値になる。多くの人びとが持ち家で、あるていど地域に根付いた生活を送っていると言えるだろう。

表2 回答者の属性

婚姻形態	結婚している	94.5	居住形態	戸建て	39.3	子ども	0～2歳	25
	結婚してない	5.5		分譲マンション	28.1		3～6歳	25.6
				賃貸住宅	28.7	年齢	7～12歳	21.6
最終学歴	中学校	1.1		公営住宅	0.6		13～18歳	19.9
	高校	8.4		社宅・寮など	3.4		19歳以上	8
	短大・高専	33.5						
	大学	50.8	居住年数	0～3年	24.6	子ども	1人	33.7
	大学院	6.1		4～6年	20.7		2人	42.9
				7～10年	15.1	人数	3人	13.1
夫の最終学歴	大学卒業	66.7		11～15年	17.3		4人以上	10.3
	大学卒業していない	27.1		16年以上	22.3			
	夫はいない	6.2				同居	夫	89.6
						人	子ども	97.3
働き方	自営業（手伝い）	18.1	夫の働き方	自営業（手伝い）	15.8	親		4.4
	正規雇用	15.4		正規雇用	72.7	配偶者の親		4.9
	非正規雇用	34.1		非正規雇用	6.7	祖父母		0.5
	産休・育休	9.9		産休・育休	1.2	兄弟姉妹		2.2
	無職	18.7		無職	3.6	その他		1.1
	その他	3.8						

一方で居住年数を見ると、0～3年の新規居住者が最も多い。しかしながら、次いで多いのは16年以上（22.3%）であり、回答者には新規居住者と長期居住者が混在しているようである。居住年数と同様に、末子の年齢も、0歳から18歳あたりまでかなりばらついている。こうした状況を反映するかのようには、回答者の年齢もばらついている。回答者の年齢には一番下が29歳、一番上が72歳である。最も多いのが40代で41%、次いで多いのが30代で36.6%である。

2 回答者の参加のあり方

次に回答者がどのように現在の場を知り、また、どのように活動をし、活動をするさいにどういったことを重視しているのか確認する。

2-1 活動の場を知る

回答者が現在、活動している場に足を運ぼうと思ったきっかけとして、あげているのは「居心地のよさ」が49.2%と一番多く、次いで「安全に過ごせる」49.2%、「アクセス」39.9%と続く（図1）。つまり、まず、居心地よく、安全に過ごせることを重視し、次いで近いことを求めているのである。楽に過ごせる場が通いやすいところにある。これらは、居場所として必要な条件である。この事実を反映するかのよう、回答者の活動の場までの所要時間は、30分以内が90%以上を占めている。

それ以外に高いのは、「友人・知人の誘い」となっている（33.9%）。後に確認するように、居場所および活動の場に友人・知人がいることは、かなり重要な要素なのである。

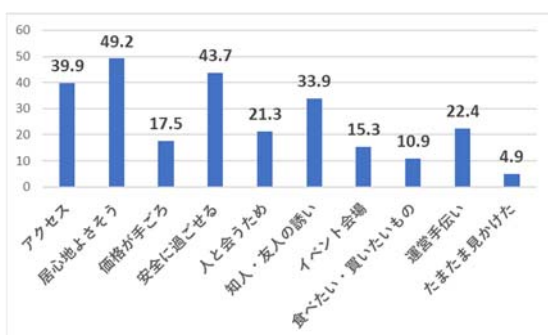


図1 場を訪問したきっかけ

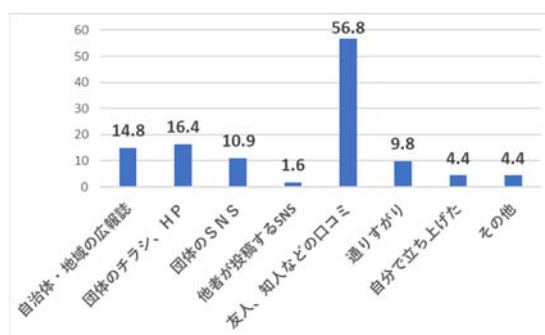


図2 場をどのように知ったか

場をどのように知ったかについては、「友人、知人などの口コミ」が圧倒的に多く（56.8%）、他の手段については、それほど目立たない。SNS 全盛の現代においても、場を知る手段は圧倒的に口コミに依っているのである。

2-2 活動に関わってから

では、活動に関わるようになってから、回答者にはどのような変化が見られたのだろうか。その点を検討する前に、まず、単純な事実から確認しておこう。

図3は現在の活動への関わり方、図4は活動の頻度である。関わり方については、ボランティアが最も多い（38.8%）。役職に就いている人は7.1%とほんのわずかである。そもそも、1団体の中での役職者の数はそう多くないので、この結果は当然だろう。

活動の頻度は週1回以上と頻りに活動している人が最も多く（31.1%）、次いで、月1回でいど（23.2%）と月2～3回でいど（19.8%）が同じくらいである。今回の回答者は、比較的に活動頻度の多い人だということがわかる。

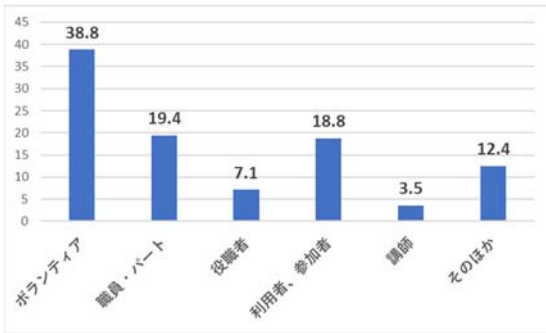


図3 現在の活動への関わり方

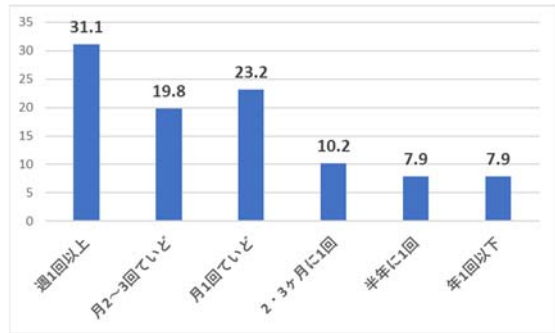
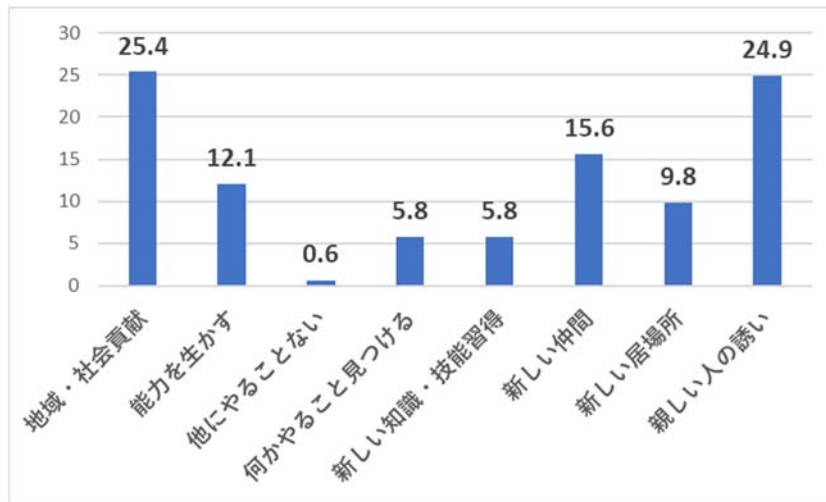


図4 活動の頻度

活動に参加した理由については、「地域・社会貢献」から「親しい人の誘い」までの選択肢の中から一つ選ぶ方式と、各項目について「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの選択から特定する方式を用いた。図5は各項目から最も重視した理由をまとめたものであり、その下の表は、各項目において「とてもあてはまる」「やや当てはまる」と回答した人の比率である。



	地域・社会貢献	能力を生かす	他にやることない	何かやること見つける	新しい知識・技能習得	新しい仲間	新しい居場所	親しい人の誘い
とても当てはまる	22.5	22	5.7	13.6	7.9	29.8	28.8	36.2
やや当てはまる	32	23.2	12.5	32.8	28.8	32.6	28.8	27.1

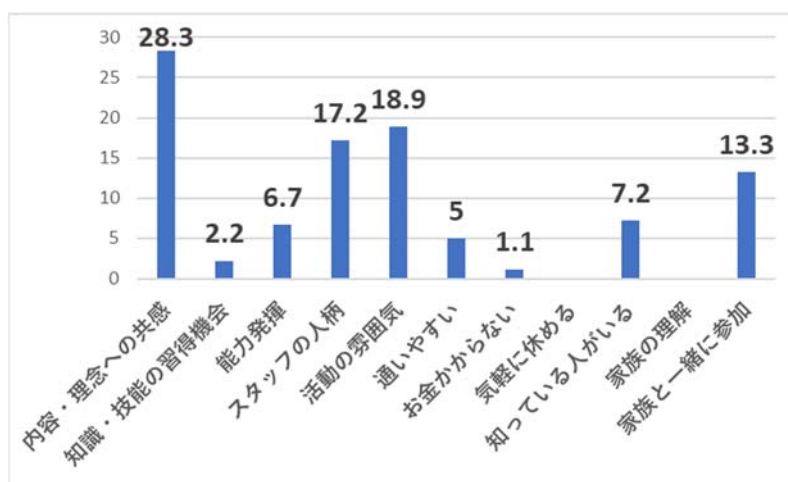
図5 活動に関わろうと思った理由

活動に関わろうと思った理由として、回答者が最も重視しているのは、「地域・社会貢献」(25.4%)と「親しい人の誘い」(24.9%)に分かれた。これはつまり、人びとが団体

の活動に参加するにあたっては、活動が社会に役立っていることと、参加者の交友についての欲求を満たすことの二つが重要であることを表している。

この傾向は、各項目を択一方式で尋ねた結果（下の表）により鮮明に現れる。回答者は、「親しい人の誘い」「新しい仲間」「新しい居場所」などの交友・所属の面（青色部分）と「地域貢献・社会貢献」「能力発揮」などの社会・自己にとっての有用性（緑色部分）の二つの要素を考慮して活動に参加しているのである。

続いて活動に参加するさいに重視したことについても確認する。こちらの質問も活動に関わろうと思った理由と同様に、各項目の中から一番重視したものを一つ選ぶ方式と、各項目について「とても重視」から「まったく重視しない」までの選択から特定する方式を用いている。図6は各項目から最も重視したものをまとめたものであり、その下の表は、各項目において「とても重視」「やや重視」と回答した人の比率である。



	内容・理念への共感	知識・技能の習得機会	能力発揮	スタッフの人柄	活動の雰囲気	通いやすい	お金かからない	気軽に休める	知っている人がいる	家族の理解	家族と一緒に参加
とても重視	50.3	13.6	19.7	66.9	68.9	58.7	26.3	22.3	22.8	30	45
やや重視	38	27.7	35.4	26	25	28.5	36.9	29.1	25.6	26.7	20.6

図6 活動するさいに重視したこと

回答者が活動するさいに最も重視したのは、「内容・理念への共感」である（28.3%）。次いで、「活動の雰囲気」（18.9%）、「スタッフの人柄」（17.2%）が続いている。これらは、活動に関わる理由における社会にとっての有用性と交友・所属と符合する。下の表でも同様に傾向を見出すことができる。

下の表は、もう一つ重要な事実を示している。赤でマークしたように、各項目を個別に尋ねると、「通いやすい」こと「家族と一緒に参加」できることがかなり重視されていることがわかる。これらは参加にあたっての条件とも言えるだろう。スタッフの参加を促すためには、雰囲気をよくするだけでなく、こういった条件面を考慮することも必要なので

ある。

最後に、活動への満足については、「とても満足」56.4%、「やや満足」40.8%と回答者は高い満足を得ていることがわかった。しかしこの点については、満足をしている人が回答したと見るべきだろう。

3 活動に頻繁に参加する人

ここまで基礎的な事実を確認してきた。これらの知見を踏まえつつ、以下では、週に1回以上参加している人を活動に頻繁に参加する人とし、こういった人はどのような特性・属性をもつのか、活動にいかなる理由で参加し、どのようなことを重視しているのか分析する。

3-1 活動に参加する人の特性・属性

(1)働き方、世帯収入と参加頻度

まず、活動に参加する人の特性、属性を検討する。図7は活動への参加頻度と人の働き方の関連、図8は活動への参加頻度と世帯収入との関連を示している。これらの図は、活動に「週1回以上参加する」と回答した人をカテゴリー別に示している。たとえば、図7で言えば、「自営業・自営業手伝い」の中で活動に週1回以上参加と答えた人が3.3%、「正規雇用」の中では25.0%ということである。そのため、各カテゴリーの数値の合計は100にはならない。以下のグラフも同様である。

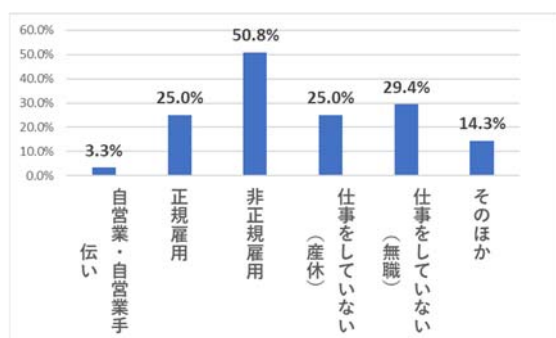


図7 週1回以上の参加と働き方

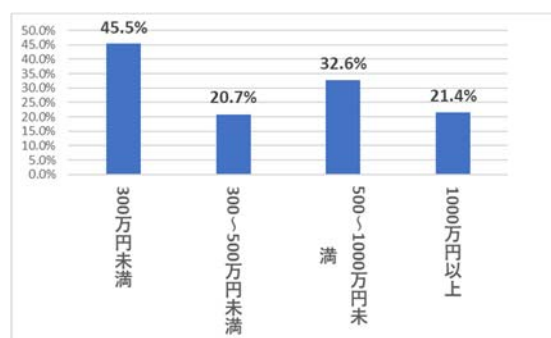


図8 週1回以上の参加と世帯収入

図7から、活動に頻繁に参加している人は、非正規雇用が最も多いことがわかる。週1回以上参加していると答えた人は非誠意雇用で50.8%である。それ以下になると、「仕事をしていない(無職)」が29.4%、「正規雇用」および「仕事をしていない(産休)」がともに25.0%とかなり下がる。

2000年代の初頭まで、ボランティアに携わるのは無職の女性、つまり専業主婦と考えられていた。今回の調査結果を見ると、そのような傾向はすでになくなりつつあることがわかる。裏返すと、非正規で仕事をしている人でも参加できる組織作りが必要だということだろう。

世帯収入については、「300万円未満」の人が最も参加の傾向が強い。世帯収入300万円と回答した人の45.5%が週1回以上活動に参加している。次いで、500～1000万円未満が32.6%、1000万円以上21.4%となっている。

ひと昔前までは、ボランティアはいわゆる「恵まれた」人の奉仕活動のように捉えられ

ていた。しかしながら、現在は決してそんなことはなく、多様な人びとが参加している。活動への参加が孤独感の解消や自己肯定感の獲得につながるという前回プロジェクトの結果を踏まえると、活動の意味合いはかなり変化していると考えられる。居場所では、サポートを「受ける側」として参加していた人が「与える側」に転じることも多い。収入についての結果は、団体の居場所としての機能も示唆している。

(2) 居住年数と末子の年齢

居住年数（図9）と末子の年齢（図10）については、今の住まいに長く住んでいる人、子どもの年齢がある程度大きくなっている人の活動の頻度が多い。

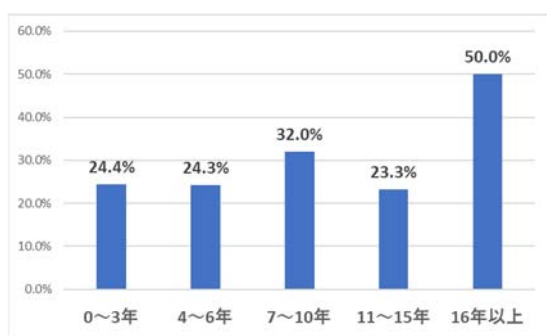


図9 週1回以上の参加と居住年数

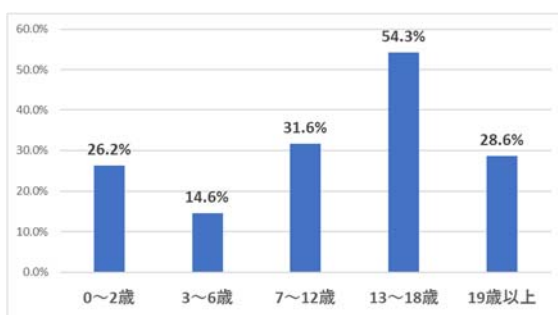


図10 週1回以上の参加と末子年齢

居住年数は16年以上の人で、週1回以上関わる人が最も多く（50.0%）、末子の年齢は13～18歳の人で週1回以上関わる人が最も多い（54.3%）。やはり、あるていど地域に根付き、子どもが自らの手を離れた人のほうが頻繁には参加しやすいようだ。

このうち前者については、図2や図5の分析で、活動への参加に当たり友人・知人の口コミが重要という結果と関連する。地元の友人や知人は、当然ながら長く住んでいる人の方が多くと考えられる。そのため、地域に転入して時間の経っていない人は、なかなか活動の網の目には引っかけられない。

この点は年少の子どもを持つ人についても当てはまるだろう。子どもが小さい人は、居住年数が浅く、地縁の少ない人が多い。友人・知人や口コミに依存する勧誘の方法は、こういった人を取り逃す可能性もある、ということ念頭におく必要があるだろう。

(3) 場所までの距離と活動に関わった期間

最後に、場所までの距離と活動に関わった期間と参加との関連を見てみよう。図11は場所までの距離、図12は活動に関わった期間と参加頻度をまとめたグラフである。

場所までの距離については、距離が近いことが圧倒的に重要であることがわかる。活動の場が10分以内と10～30分の人では、それぞれ33.3%、33.7%の人が週1回以上活動しているのに対し、30～1時間ではわずか7.1%にとどまる。場が1時間以上かかるところに

ある人で、週1回以上参加している人はいない。

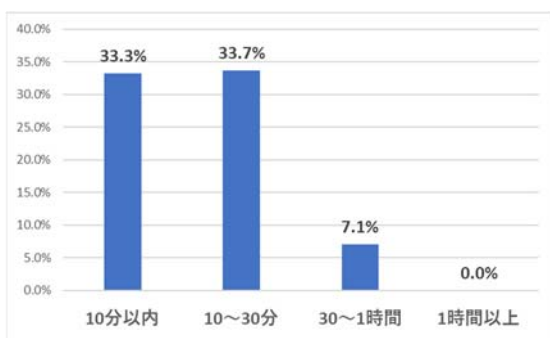


図 11 週1回以上の参加と場への距離

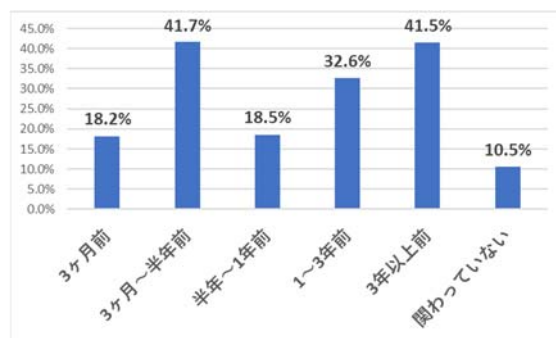


図 12 週1回以上の参加と活動期間

この結果は、居場所・場が地域に複数あることの重要性を示している。かりに、活動意欲があったとしても、その場が近くになれば、人は活動ができない。今回の結果は、身近に活動できる場があることの重要性を改めて示している。

活動期間についても興味深い結果が見られる。週1回以上参加する人は、「3ヶ月~半年前」で増え(41.7%)、その後いったん下がった後に、1年を超えるとまた増え、3年以上活動している人に多く見られる(41.5%)、つまり、活動を開始して半年の時期に谷間が見られるのである。

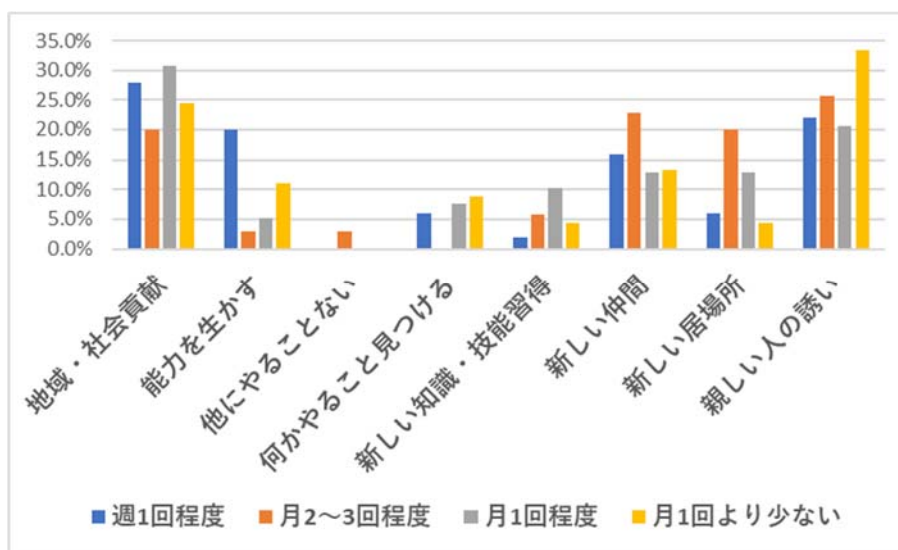
この谷間は「活動の品定め」の時期だと考えられる。場に入った人は、まず、熱心に参加し、その後、半年くらいすると活動をさらにするべきか、他のことをするべきかいったん考える。その後、「他のことをする」選択をした人は、活動から抜けるなどの決断をするため、1年を超えるところで、再び増加に転じていると考えられる。したがって、スタッフの管理という意味では、ある程度なれてきた人が、その後も継続するかということが重要であろう。

4 活動に参加した理由、活動から得たもの

4-1 活動に参加した理由

参加の頻度と活動に参加した理由との関連を見ると、図5で確認した「親しい人の誘い」「新しい仲間」「新しい居場所」などの交友・所属の面と「地域貢献・社会貢献」「能力発揮」などの社会・自己にとっての有用性が、それぞれに別の役割を果たしていることがわかる。図13は各項目から最も重視した理由を参加頻度別にまとめたものであり、その下の表は、各項目において「とてもあてはまる」と回答した人を参加頻度別にまとめている。

まず、上の図から確認しよう。この図を見ると、参加頻度の高い人は他のカテゴリーに比べて「能力を生かす」ことを重視していることがわかる。週1回以上参加している人の20.0%は「能力を生かす」ことを参加の理由として最も重視している。同様の数値は他のカテゴリーでは、最も大きいものでも、「月1回より少ない」の11.1%にとどまる。また、地域・社会貢献や親しい人の誘いは、参加頻度と関わりなく多く人が重視していることがわかる。



	地域・社会貢献	能力を生かす	他にやることない	何かやること見つける	新しい知識・技能習得	新しい仲間	新しい居場所	親しい人の誘い
週1回程度	30.2%	24.5%	9.6%	19.2%	7.7%	26.9%	26.4%	38.5%
月2~3回程度	23.5%	17.6%	5.9%	11.8%	8.8%	42.9%	44.1%	34.3%
月1回程度	17.1%	17.5%	2.5%	15.0%	7.5%	25.0%	30.8%	32.5%
月1回より少ない	20.0%	26.7%	4.3%	4.3%	4.3%	26.1%	15.2%	37.8%

図13 参加頻度別の活動に関わろうと思った理由

この図を見ると、「親しい人の誘い」「新しい仲間」「新しい居場所」などの交友・所属

の面と「地域貢献・社会貢献」「能力発揮」などの社会・自己にとっての有用性の異なった役割がわかる。

まず、「親しい人の誘い」については、どのカテゴリーでもまんべんなく「とてもあてはまる」と回答した人が多いことがわかる。上の図からも、「親しい人の誘い」を活動に参加した理由の一番にあげた人が多いことが明らかである。したがって、活動に関わるに当たっては「親しい人」がいることが非常に重要であることがわかる。

「地域・社会貢献」「能力を生かす」と「新しい仲間」「新しい居場所」については、それぞれ異なった層に作用している。「地域・社会貢献」「能力を生かす」は活動に積極的に参加する層が重視する一方で、「新しい仲間」「新しい居場所」は、「月2～3回程度」の参加者が重視している。ここから以下のことが考えられる。

活動に頻繁に参加する人びとは自己または社会に対して活動が「役立つ」ことを強く意識している。一方、中間的な参加者は「新しい仲間」「新しい居場所」といった仲間探し、居場所探しを重視しているのである。団体の運営者は、この多様なニーズを念頭に場を運営する必要がある。

4-2 活動に参加した理由と子どもの年齢

活動に参加した理由は、末子の年齢別に見ても興味深い結果が確認された。表3はその結果である。形式は図13の下にある表と同様である。

表3 末子の年齢と活動に参加した理由

	地域・社会貢献	能力を生かす	他にやることない	何かやること見つける	新しい知識・技能習得	新しい仲間	新しい居場所	親しい人の誘い
0～2歳	17.5%	7.5%	7.3%	14.6%	7.3%	45.2%	40.5%	39.0%
3～6歳	20.0%	20.5%	4.7%	15.9%	6.8%	40.9%	43.2%	34.1%
7～12歳	26.3%	34.2%	7.9%	10.5%	13.2%	13.2%	10.8%	34.2%
13～18歳	17.6%	23.5%	2.9%	8.8%	5.9%	8.8%	8.8%	32.4%
19歳以上	35.7%	21.4%	7.7%	23.1%	7.7%	38.5%	46.2%	38.5%

末子の年齢別に活動に参加した理由を見ると、ライフコース別に活動に求めるものが異なることがわかる。子どもが小さい頃は、「新しい仲間」や「新しい居場所」（青色）を求めた参加が多い。一方、子どもが徐々に大きくなると、「地域貢献・社会貢献」「能力発揮」（緑色）などの社会・自己にとっての有用性を理由とした参加が増える。子どもが生まれ、地域になじんでいない末子低年齢層は仲間や居場所などを求め、子どもの手がある程度離れた層は社会貢献や能力の発揮など、自らの力を出し世の中に役に立つことを求めるのである。

また、子どもが19歳以上になり手を離れた世代の人は「地域貢献・社会貢献」「能力発

揮」「新しい仲間」「新しい居場所」「やること」などさまざまなことを求めて参加している。子どもが自立することにより改めて人生を見直し、社会や自らの役に立っている有用感、仲間や居場所などの所属感、すべきことなど多様なものを探索しているのであろう。

この結果から、活動に参加する人もライフコースにより求めるものが異なっており、幅広い人を集めるには、それに対応したものを用意する必要があると言える。

4-3 活動に参加したことによる自身の変化

活動への参加頻度と活動に参加したことによる自信の変化についての関連を見ると、当然ではあるが、活動に参加している人ほど、活動に高い意義を見出していることがわかった。

表4は活動に参加したことによる自身の変化について、多重選択方式で回答してもらった結果を参加頻度別にまとめている。これを見ると、週1回程度活動に参加している人は、すべての項目においてよい変化をしたと感じている人が多い。

表4 参加頻度別の活動を通じた変化

	自信が持てる	仲間が増えた	家族関係よくなった	視野が広がった	挑戦の気持ち増えた	成長を実感	心身の健康よくなった	物事の機会増えた	新たな能力に気づいた
週1回程度	32.7%	81.8%	18.2%	76.4%	40.0%	50.9%	38.2%	54.5%	23.6%
月2~3回程度	14.3%	82.9%	8.6%	68.6%	25.7%	17.1%	22.9%	45.7%	22.9%
月1回程度	9.8%	63.4%	2.4%	61.0%	24.4%	19.5%	4.9%	31.7%	9.8%
月1回より少ない	8.7%	54.3%	4.3%	58.7%	15.2%	13.0%	10.9%	23.9%	6.5%

こうした感覚は月2~3回程度参加する人にも見られる。月2~3回程度の参加者はそれ以下の人に比べ、「仲間が増えた」「心身の健康がよくなった」「物事の機会が増えた」「新たな能力に気づいた」と感じる人が多い。

また「仲間が増えた」「視野が広がった」という項目については、活動頻度別に肯定的に評価する人の比率が異なるものの、どのような人も総じて変化を実感している。つまり、活動への参加は、参加者の視野を広げ、仲間が増えるという効果があるのである。ここから少ない参加であっても、活動への参加は孤独・孤立の防止に効果があると考えられる。

一方で、活動に頻繁に参加している人が、活動自体に満足しているかということとは異なる。図14は活動への参加頻度別に、活動に「とても満足」と回答した人の比率を表している。

これを見ると、参加頻度別に確認すると、頻繁に参加する、つまり週1回程度参加する人が他の人に比べ「とても満足」と回答しているわけではないことがわかる。むしろ月2~3回程度の人の方が「とても満足」と回答している人の比率が多い。この理由自体は

容易に想像し得ないが、少なくとも「頻繁に参加している人＝満足している人」と短絡的に考えられないことが分かる。

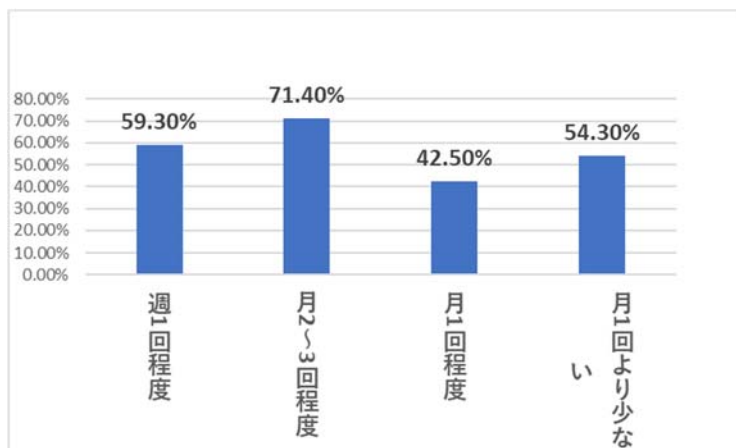


図 14 参加頻度別の活動への満足

5 代表者の意向と参加者の満足

5-1 代表が重視することとスタッフの満足

まず、代表が重視していることとスタッフの満足との関連を確認する。この調査では13団体の代表に、場の運営の際に重視することを尋ねている。この回答別に活動参加者の満足度を分析した。表5がその結果である。

表5 代表が重視していることとスタッフの満足

		とても満足	やや満足	やや不満足	n			とても満足	やや満足	やや不満足	n
地域や社会に貢献	とても重視	54.6%	42.1%	3.3%	152	運営スタッフを増やす	とても重視	36.4%	54.5%	9.1%	11
	やや重視	66.7%	33.3%	0.0%	27		やや重視	52.5%	44.3%	3.3%	61
スタッフの参加	とても重視	50.0%	47.1%	2.9%	102	事業規模・内容の拡大	どちらでもない	58.9%	38.9%	2.2%	90
	やや重視	64.9%	32.5%	2.6%	77		あまり重視しない	70.6%	29.4%	0.0%	17
スタッフの仲の良さ	とても重視	57.0%	40.0%	3.0%	165	事業予算の確保	とても重視	50.0%	42.9%	7.1%	14
	やや重視	50.0%	50.0%	0.0%	14		やや重視	53.1%	43.8%	3.1%	64
スタッフの能力発揮	とても重視	55.1%	41.5%	3.4%	147	利用者の増加	どちらでもない	40.0%	56.7%	3.3%	30
	やや重視	64.3%	35.7%	0.0%	28		あまり重視しない	67.6%	31.0%	1.4%	71
	どちらでもない	50.0%	50.0%	0.0%	4		とても重視	53.0%	43.4%	3.6%	83
利用者の満足	とても重視	50.4%	46.3%	3.3%	121		やや重視	59.0%	38.6%	2.4%	83
	やや重視	69.0%	29.3%	1.7%	58		どちらでもない	61.5%	38.5%	0.0%	13
							とても重視	50.0%	45.2%	4.8%	42
							やや重視	50.0%	47.3%	2.7%	74
							どちらでもない	68.3%	30.2%	1.6%	63

この表を見ると、代表が重視していることとスタッフの満足には一定の関連があることがわかる。表の青いゾーンは、団体の存在意義とスタッフへの配慮に関するものだ。地域や社会の貢献は団体の存在意義の根幹であり、スタッフの参加や仲の良さ、能力発揮は、スタッフがいかに充実した活動を行えるかといった配慮である。

この項目については代表が「とても重視」または「やや重視」と回答したところに、メンバーが「とても満足」と回答している。この4つの項目は、そもそも「あまり重視しない」「重視しない」と答えた代表は一人もいないので、社会貢献やスタッフの配慮を重視するほど満足すると一概には言いがたいが、場の運営では非常に重要な要素とすることができる。

一方、赤い色のゾーンは「利用者の満足」を除くと事業の拡大に関する項目が並ぶ。この結果はかなり興味深い。表を見ると、代表者がこれらの要素を「あまり重視しない」または「どちらでもない」と回答しているグループにおいて「とても満足」しているスタッフが最も多くなっている。

ここから、代表の事業規模・内容の拡大や事業予算の確保、スタッフの増員や利用者の

増加への思惑とスタッフの満足は相反する、ということがわかる。場の運営はボランティアで成り立っており、経営とは一線を画す。そのため、代表が経営的な方向に足を踏み入れすぎてしまうと、スタッフの満足は縮小してしまうのである。

とはいえ、代表が事業を継続するためにすべきこともある。代表の思惑とスタッフの望みのズレは、場の運営に支障を来す可能性がある。場の継続に当たっては、その点をクリアする必要がある。

5-2 代表者の自己評価とスタッフの満足

最後に、代表者の活動への自己評価とスタッフの満足との関連を確認しよう。表6がそのまとめである。

表6 代表の活動への評価とスタッフの満足

	とても満足	やや満足	やや不満	n
とても順調	43.50%	52.20%	4.30%	23
やや順調	59.60%	37.20%	3.20%	94
どちらでもない	68.40%	31.60%	0.00%	38
あまり順調でない	37.50%	58.30%	4.20%	24
合計	56.40%	40.80%	2.80%	179

この表を見ると、代表の活動への評価が高いからといって、必ずしもスタッフの満足が高いわけではないことがわかる。代表が「とても順調」と評価している団体では、スタッフは「やや満足」と回答している人が最も多い。一方、代表が「やや順調」「どちらでもない」と回答している団体では、スタッフは「とても満足」と回答している人が多い。とくに代表が「どちらでもない」と回答している団体では、68.4%の人が活動に「とても満足」と答えている。

5-1でも指摘したように代表とスタッフの思惑はすれ違う可能性がある。代表が事業を拡大したい、スタッフや利用者を増やしたいと思っても、スタッフはそう考えていない可能性がある。これらのズレがこの結果をもたらしたと考えられる。

最後に、5節の結果の注意点について指摘しておきたい。第1節の表1で示したように、今回の回答には団体Fのメンバーの意見が色濃く反映されている。詳しい説明は省くが、代表調査とメンバー調査の関連を見た場合、この傾向がより強く反映される。したがって、5節の結果については、さらに調査を重ねて頑健な証拠を得る必要があるだろう。